

## システム再構築における BI システムの中核に Dr.Sum EA を採用 1600 万件の受注／出荷／請求／在庫データの戦略的な活用を加速

### Interview



日産化学株式会社  
情報システム部 主席 玉島 良則氏

### Company Profile

#### 日産化学株式会社

創業：1887年  
所在地：東京都中央区  
事業内容：基礎化学品事業／無機材料事業／機能材料事業／ファインテック事業／電子材料事業／農業化学品事業／医薬品事業における製品開発および販売  
URL：  
<http://www.nissanchem.co.jp/>



### 分析業務の大幅な効率化を実現

#### コンプライアンス対応にも Dr.Sum EA を活用

#### BI システムの刷新が急務 分析業務に Dr.Sum EA を採用

日産化学株式会社（以下、日産化学）は、1887年に日本初の化学肥料製造会社として創業した総合化学メーカーだ。「精密有機合成」「超微粒子制御」「機能性高分子」などの独自技術をベースに、化学品、電子材料、農業化学品、医薬品などの分野においてさまざまな製品を開発し、グローバルで高い評価を得ている。また、同社は国内4拠点を中心に、国内外の大学および公的研究機関、企業との共同研究や技術提携を積極的に展開し、今後も研究開発事業を軸にさらなる企業成長を目指している。

同社では、2002年4月より基幹業務システムとしてERPパッケージを本格稼働しており、同時に情報系システムの一環としてDWH（データウェアハウス）システムを導入していた。同社はさらなる成長の施策の一環として、経営プロセスから得られた情報資源の全社的な活用と経営効率化を目的にERPパッケージのバージョンアップを決定。同時にビジネスインテリジェンス（BI）システム刷新の中核としてDr.Sum EAの採用を決定した。

#### データの詳細表示が課題 ROIの高い効率的なBIシステムを追求

情報システム部 主席 玉島 良則氏は、BIシステムの刷新について「ERPの更新プロジェクトを2006年5月よりスタートしましたが、DWHシステムのバージョンが古かったため、一度にバージョンアップを行うことができませんでした。そのため段階的なバージョンアップが必要になり、システム移行の負荷が大きくなりました。また使用してい

ない機能でもライセンス料が発生することから、コストの面においても、よりROI（投資対効果）の高い効率的なBIシステムを構築することが必要でした」と話す。

また同社では、自社開発したBIシステムである「Nweb」も運用していたが、Nwebに蓄積されるデータ量が増加するに伴って、データ処理におけるパフォーマンスが不足するという課題も抱えていた。「現場管理者がキューブからデータをドリルダウンして詳細を見ようとすると、システムが停止してしまうほどパフォーマンスが低下するという課題を抱えていました。これらの課題を解決する方法を模索していたときに、Dr.Sum EAが活用できるのではないかと考えました」と玉島氏は話している。

#### スピード・価格・開発の容易さ すべての項目で Dr.Sum EA が高評価

日産化学では、2005年より遠隔にある倉庫においての商品の品質分析票出力とロット別在庫管理のためにEAIツールとともにSVFとDr.Sum EAを導入していた。しかし、このときは在庫管理が目的だったためにDr.Sum EAの利用は実現していない。

玉島氏は、「当時はBIシステムのために専用のDWHを作ることになじみませんでした。そのため当初はBIシステムの移行にDr.Sum EAを据えることも想定していませんでした。しかしほかのツールではどうしても期待するパフォーマンスを得ることができませんでした。導入していたDWHの構築経験により、専用のDWHを構築することにも抵抗がなくなっていたのでDr.Sum EAの検討を開始しました」と話す。

「パフォーマンスや価格、開発が容易で短期間

### 導入背景

- ERPに登録された大量データの有効活用
- データ処理時のシステムパフォーマンス低下
- データの詳細検索が可能なシステムの要望

### 導入ポイント

- 高いパフォーマンス
- システムが安価
- 短期間での導入が可能

### 導入効果

- 高速データ抽出で効率的な分析に活用
- Excelで容易なデータ加工
- 内部統制に必要な監査用データの抽出

導入できることなど、さまざまな項目を総合的に評価した結果、すべての項目において Dr.Sum EA は満足できるものでした。そこで 2006 年 10 月、新しい BI システムとして採用することを決定しました」と玉島氏は当時を振り返る。また、Dr.Sum EA は Nweb が苦手としていた明細検索が高速なことも採用ポイントのひとつだった。

### 5分かかっていた検索表示が 10秒に短縮 業務効率化に不可欠になった Dr.Sum EA

3カ月の開発期間を経て 2007 年 1 月にカットオーバーした新しい BI システムの概要は、次のとおり。まず、ERP の更新差分データを ETL ツールで抽出し、抽出した受注／出荷／請求／入庫の 4 種類のデータをデータベース経由で Dr.Sum EA に取り込む。蓄積されたデータは、Microsoft Excel をインターフェイスに、絞り込みやドリルダウンなど、自由な分析を行うことができる。現在、Dr.Sum EA には分析対象のデータとして 4 種類の DWH にそれぞれ約 400 万件が登録されており、必要なデータをストレス無く取り出し、効率的な分析に役立てることが可能になっている。

「各事業部の営業スタッフが、販売実績と購買担当者の入庫実績明細、および購入価格差異を把握するための分析に活用しています。旧 DWH システムではさまざまな検索結果を表示するのに平均して約 4～5 分かかっていましたが、Dr.Sum EA は 10 秒から 1 分で結果を返してくれます。また、分析結果を Excel で表示できるので、ユーザーが容易にデータを加工することも可能です。いまや Dr.Sum EA はユーザーの効率的な分析業務に不可欠なシステムになっています」(玉島氏)

玉島氏はさらに、「経理部門では、税務調査時の明細データ作成に Dr.Sum EA を使用しています。また RM (リスクマネジメント) 推進部では、内部統制における業務プロセス監査のための販売伝票および購買伝票の抽出に活用しています。これらは当初、まったく想定していなかった効果です。この仕組みはユーザーに要件をもとに、ヒアリングを行いながら、2008 年 2 月にほぼ完成。2008 年 7 月から RM 推進部内で評価を開始し、10 月から本格運用を開始しています」と話している。

### Dr.Sum EA の変化対応力が 経営プロセスを変えるインパクトを与える

日産化学は 2008 年 2 月より、業績のさらなる向上を目的に、予算管理システムも運用している。この仕組みは、Dr.Sum EA で読み込んだ販売実績画面に販売予算を入力することで効率的に予算実績管理を行うもの。入力された予算データは、EAI ツールによってデータベースに統合される。

統合されたデータは、データベースから抽出され、Dr.Sum EA のテーブルに再登録される仕組みになっている。玉島氏は、「今後は、データ精度をさらに高めるため、関連会社においても販売実績と販売予算を別々に集計し、それぞれの差異を表示させる仕組みに Dr.Sum EA Datalizer を導入する計画です」と話す。

さらに、「Dr.Sum EA はパフォーマンスが高いことはもちろん、価格が安く、開発も容易。今後は、関係会社にも Dr.Sum EA を導入し、さまざまな仕組みに応用していきたいと考えています」と今後さらに活用範囲を拡げていく意向だ。

### 導入製品

#### Dr.Sum EA Advanced

大容量のデータを部門間や全社規模で集計分析するための多次元高速集計エンジン。

### システム構成

